

木附沢 麦青（きつけざわ・ばくせい）

1、プロフィール

昭和 30 年代、八戸俳壇に風土俳句の狼火が上がった。その旗をめざして岩手県二戸から八戸に移住、八戸の俳句を学び、故郷二戸の山を精神にして、3年後角川俳句賞を獲得した。

<生没>

1936(昭和 11)年1月5日 ~

<代表作>

句集『母郷』

現代俳句俊英 30 人集『南部牛追唄』

<青森との関わり>

岩手県二戸生まれ。昭和 39 年八戸市へ移住。昭和 59 年八戸俳壇の刷新を指標に俳誌「青嶺」を創刊、主宰。

2、作家解説

昭和 34 年「北辺有情」をもって村上しゅらが角川俳句賞受賞。北国からの受賞は初めてで、その素材は地方の古くからのもの、北方特有の「かなしさ」を追究した作品で、「風土性俳句」と名付けられ、全国的なブームが起こった。岩手県二戸の山間に育ち、若くから俳句の道に志した青年は、我が意を得たりと、39 年、村上しゅらを慕い、故郷を捨てて、俳句に生きる道を求めて八戸市に定住の地を移した。その青年は木附沢麦青である。その為生業の寿司職を1週間で学んだと巷間伝えられる。

すぐさましゅらを訪ねしゅら俳句を学んだ。2年後挑戦した角川俳句賞は、一度麦青に決定しながら、既発表作品があるという理由で取り消しとなった。しかし、それにもめげず再度挑戦し、二戸山中に籠って成した「陸奥の冬」で次の年昭和 41 年、第 12 回角川俳句賞を手中にした。

「立春の山が山押す陸奥の国」。生まれ育った奥羽二戸の山々。炭焼く父母、それらは俳句という眼鏡を通して、再び胸に強く焼き付けられ、俳句の原点として活動し続ける。

師である大野林火は「日本のチベットといわれるみちのくの原始のくらしがそこにあるから」「彼の目は終始、山中の生家付近を離れない」「現実には都会暮らしでもその血は都会と同化出来ぬ」等々の言葉を残した。その言葉は生涯付いてまわるであろう。

昭和 59 年、主宰誌「青嶺」発刊。それは今までの八戸俳壇に飽き足りない新進の層が結束したものである。

3、資料紹介

○『母郷』

図書

1972(昭和 47)年9月 10 日

190mm × 135mm

第一句集。昭和 32 年入会以来 15 年間「浜」誌上に発表した中から 423 句を厳選し収録。「彼の眼は始終、山中の生家付近を離れない」(大野林火)というように日本のチベットといわれる岩手山中の生家付近の厳しい生活を詠んだ句が多いが、ゆとりある句風である。